



The 20th

CONCERTINO

DI  
KYOTO

CONDUCT BY

SHUNSAKU TSUTSUMI





## 御悦びの言葉

鈴木 鎮 一

コンチェルティーノ・ディ・キョウトの二十周年記念演奏会を心から祝福し御盛會を祈ります。

二十周年ときいて、あれ／＼と驚きました。歳月の流れの早さ、いつの間に二十年経ったのか、と思わされます。十年ひと昔、その言葉を借りて言えば、その二昔前のコンチェルティーノ・ディ・キョウトの演奏から、今日へとどのような大きな成長の歴史をたどって、今日の立派な絃楽団に作りあげられたことか、皆さんの真剣な努力に対し、心からの賞讃の拍手をおくりたいと思います。

言葉や文字を超えた生命の言葉、音楽の世界、優れた音楽は、高い感覚の人を育てる。

音にいのち在り、姿なく生きて、音に心を、音にいのちを、美しき音を、美しき心を……之等

の言葉は今回「私の一日一言集」の暦を出版することになり選んだ私の一日一言の中の言葉ですが、音楽を愛するコンチェルティーノ・ディ・キョウトのメンバーの皆さんの芸術によって高められた心、感覚、その生命の感動から生れる今回の記念演奏会には、そうした私の一日一言の言葉のすべてが、美しき音となり、生命のふれ合いの音楽となって、とても楽しく、又大きな感動ある夕べとなることと思います。今日までとにかく二十年の精進、尊いことです。

いよいよ成人式を迎えたコンチェルターノ・ディ・キョウト、おめでとうございます。まだ若い大きな発展、成長への歩みは、いよいよこれからです。益々高くへと皆さんの今後の精進を祈ってやみません。

(才能教育研究会々長)

## 二十周年記念演奏会によせて

高橋 利 夫

音楽の世界では、伝統というものがしばしば非常に重要視される。これがもし表面的な伝統のみ受け継いで、表現上の内容的な伝統をおろそかにしてしまうと、かえって弊害になってしまう。この音楽的表現上の最も重要な、又芸術的な伝統の一つはいかにして美しいハーモニーを響かせるかという点にある。一つのパートがリズムとメロディをもち、独立した生命を表現しながら、他のそれらと合さった時、いかにお互いに思いやりと注意をしながら和合して、美しく響かせ合えるか、つまり自分も生かし、しかも同時に他人も立てる理想的な人間の和合の姿がそこに現れるのである。

私は第十四回から十八回迄全部で五回コンチェルティーノと共演する機会に恵まれ、ある時はソリストとして、ある時は指揮者として一諸に音楽を創らせて貰ったが、特にハーモニーに関して不満を感じることはほとんどなかった。これは先輩新井先生のひたむきな厳しい指導に負う所大であると思うが、現在日本のプロのアンサンブルでこれだけのハーモニーを聞かせてくれる団体はないのである。新井先生は子供達に指導曲集を指導している時に、すでにこのハーモニックなスケールを練習させておられる様であるが、これはヨーロッパの音楽教育の重要なポイントでもあり、そう云う方向の下に二十年の歴史があると云うことはすばらしいことである。私自身もコンチェルティーノと接することによってずい分勉強させて貰った。このアンサンブルの生命と和合の姿が今後益々みがかれて、より高いより深いものになって行くだらうことを信じて止まない。

(フルーティスト)



ルイ・モイーズ氏との共演に於る高橋利夫氏(右)



プログラム

モーツァルト 喜遊曲 第17番 K. 334  
アレグロ / テーマ・コン・ヴァリアツィオーニ / アンダンテ /  
メヌエット / アダージョ / メヌエット / ロンド アレグロ

→\*\*\*←  
ハイドン ヴァイオリン協奏曲 ハ長調 (独奏・田中信介)  
アレグロ・モデラート / アダージョ / フィナーレ プレスト

スーク 弦楽の為のセレナード 作品6  
アンダンテ・コン・モート / アレグロ・マ・ノン・トロッポ・エ・グラツ  
ィオーソ / アダージョ / アレグロ・ジョコソ・マ・ノン・トロッポ・プレスト

PROGRAM

MOZART Divertiment No. 17 K. 334  
Allegro / Tema con variazioni / Andante /  
Menuetto / Adagio / Menuetto / Rondo Allegro

HAYDN Violin Concerto C-major (Solo: Shinsuke Tanaka)  
Allegro moderato / Adagio / Finale Presto

SUK Serenade for String Orchestra Op. 6  
Andante con moto / Allegro ma non troppo e grazioso /  
Adagio / Allegro giocoso, ma non troppo presto

堤 俊 作 (指揮)



英国の音楽雑誌“ミュージック&ミュージシャンズ”1975年1月号誌上でロンドンの批評家フランク・G・バーカーより「未来の大指揮者」と激賞された堤俊作は、1947年大阪に生まれ、故斉藤秀雄氏に学び1970年桐明学園大学音楽部を首席で卒業。1972年東響演奏会でデビュー。以来国内主要オーケストラの客演やオペラ、バレエ、合唱等広範囲にわたる活動を続けてきた。1973年の牧阿佐美バレエ団ヨーロッパ公演、1974年東京ユースシンフォニーのヨーロッパ公演、1974年ロンドンでのルパート指揮者コンクール入賞をきっかけに海外にも進出し、ロンドン交響楽団、サドラーズ・ウエルズ劇場での「蝶々夫人」公演をはじめとして、英国や北欧での評価を得ている。

1975年には東京シティ・フィルを創立し、その育成に力を注いでいる。またアンネローゼ・シュミット、ルース・ラレード、エフゲニー・モギレフスキー、ルイゼ・ワルカー、ルドルフ・マンダルカ、タチアナ・ニコライエワ、エルネスト・ビテッティ等の外来音楽家と数多く協演し、ソリストたちから絶大の信用を得ている。殊にアンネローゼ・シュミットからは協奏曲レコーディングの際の指揮者として指名を受けている。

1978年9月には、故エルネスト・アンセルメ没後10周年を記念してジュネーブ国際音楽コンクールの一環として開かれた「エルネスト・アンセルメ指揮者コンクール」に於て、最高位金賞を獲得した。

現在、東京シティ・フィルハーモニック管弦楽団常任指揮者、バッハ合唱団常任指揮者として、シンフォニー、オペラ、バレエ、レコーディング、放送出演と多岐に渡る活動を行う傍、桐明学園大学講師として、後進の指導にもあたっている。

近い将来、日本を代表するであろう国際的指揮者である。

## コンチェルティーノ 20年のあゆみ

カール・ミュンヒンガー卒いるシュトゥットガルト室内オーケストラが来日したのは、戦後間もなくであった。ヴィルトゥオーゾ・ディ・ローマ、ソチエタ・コレルリの名が、レコードで紹介されはじめたのも、その直後ぐらいであったろう。そして、日本のクラシックファンや専門家の間でもようやくバロック時代を中心とした音楽が理解されようとしていたちょうどその頃のことだ。京都に本格的な才能教育のヴァイオリン教室を作るため、本部松本から若いヴァイオリン指導者が派遣された。彼は、まだバロック音楽の黎明期といった頃に、いち早く、素朴ではあるが、きらめく様な輝きをもつバロック音楽の美を見だし、ヴィヴァルディを愛し、バッハを畏敬した。そして自分の教え子達には、ぜひバロック音楽を演奏する楽しさを教えたいと思ったし、自ら、ローマ合唱団や、ソチエタ・コレルリのように、ヴィヴァルディやコレルリを自由自在に、高い音楽



性をもって演奏できる合奏団を作りたいというビジョンを抱いていた。

この夢の実現の為、京都に於けるヴァイオリン指導の開始と同時に、生徒達による合奏団の組織に着手したのである。

まず、チェロの生徒育成のため、東京からチェロの指導者を招聘し、次にアマチュア指揮者ナンバー1の井手章夫氏を専属指揮者として招き、合奏団の形態を整えていった。

彼らの心血を注ぐ指導によって、見事な子供の合奏団ができあがった。これが、コンチェルティーノの最初の姿であり、メンバーのほとんど戦後のベビーブーム(昭和22~24年)生れの当

時10才前後の小学生であった。

十二分な練習とリハーサルを重ねて開かれた第一回演奏会は未だ京都公会館や近代的なホールがなかった昭和34年11月、重々しい緞帳のさがった祇園公会館で行われた。

プログラムは、サンマルティーニのシンフォニア、ハイドンのヴァイオリン協奏曲、ヴィヴァルディのチェロ協奏曲と調和の幻想第九番、モーツァルトの喜遊曲K. 136であった。

この演奏会の模様は、一本の古い録音テープに収録されている。テープヒスの中から、緞帳の内に整列したメンバーの緊張と自信と不安といったものが伝わってくる。緞帳の上る音に続

いて、コツコツという指揮者の足音、拍手のあとの沈黙を破るサンマルティーニのシンフォニアの調べ……。

演奏が進むにつれ、メンバーは日頃の実力を十分発揮し、すばらしい演奏を展開している。各自が自分のパートを完全に暗譜するほどに練習してきた自信からだろう。

10才前後の小学生による一夜の室内楽演奏会、これは当時としては画期的で驚嘆すべきことであったにちがいない。

こうして、成功の内に第一回演奏会を終え、これから、昇り切る事のない階段を、一段一段、のぼることになるのだ。

「10年ひと昔」という言葉があるが、コンチェルティーノの演奏史上にもまさに、この10年という区切があてはまる。

第一回から第十回までの10年間の演奏についていえば、「小さな子供達がうまく演奏する」ということに注目を集めた。京都市交響楽団の初代指揮者、カール・チェリウス氏に絶賛され日本フルート界の大御所、吉田雅夫氏との共演に於て、同氏をして「この子供達が成人した時が非常に楽しみ」と言わしめ、あのベストセラーを続けているイ・ムジチ合奏団による「四季」

の発売されるより前に、すでに「四季」全曲を行なう等、各方面より注目を集めた。

演奏曲目の点では、ヴィヴァルディ、バッハ、ヘンデル等の作品に関しては、かなり高いレベルの演奏が可能になってきたが、バロック時代よりあとの作品、ロッシニやグリーグ等の作曲家のものについて、今一步の成長が望まれ、そういった諸作品の征服が大きな課題となっていた。その中で迎えた第十回演奏会。このすばらしい、感動的な一夜を忘れることはできない。

当夜のプログラムは、コレルリのサラバンド・ジグとバディネリ、バッハのオーボエとヴァイオリンの為の協奏曲、ヴィヴァルディの2台のチェロの為の協奏曲、レスピーギの古代舞曲とアリアより第3組曲であった。

NHK交響楽団の首席オーボエ奏者、丸山盛三氏を迎えてもたれたこの演奏会について、同氏は、すべての曲の出来ばえを賞賛し、一夜を、その演奏会の興奮さめやらぬ団員たちと語り明かした程だ。

その夜の演奏は、メンバーの年齢的成長と、10年間培われてきた音楽的成長の融合であり、

「子供の」オーケストラというイメージを脱し、「若者の」「青年達の」オーケストラとしての第一歩を踏み出す記念すべきものだったのであり、それ以降の飛躍的進歩を暗示させるものであった。

11回目以降の主な活動は、「四季」の再演にはじまり、ドヴォルザーク、チャイコフスキーの2大弦楽セレナードの演奏、フルートのルイ・モイーズ氏との協演等々である。

この時期に於ては、曲目による出来不出来はほとんどみられず、いつも一定のレベルが保たれ、ルイ・モイーズ等の大ソリストとの協演ともなれば、そのソリストのインスピレーションをすばやくキャッチし、日頃以上の演奏を示しうる力をつけてきたのである。

又、それまで一貫して指揮をとってきた井手氏にかわって、一時、フルーティストの高橋利夫氏が独奏と指揮を行なった時期があった。氏は巨匠マルセル・モイーズの愛弟子あり、その奏法、音楽性を学ぶことができたのは、コンチェルティーノにとって、大へんラッキーであったことをつけ加えたい。

しかし、コンチェルティーノは何といっても、井手章夫氏の

オーケストラであり、その音楽性は井手氏のセンスが浸透している。それ故、もし、指揮者なしで演奏したとしても、あるいは聴衆はそこに、指揮者井手章夫氏の姿を見ることが出来るかも知れない。

コンチェルティーノ20年間の成長は、井手氏の音楽に対する情熱と卓越した指導力によることはいままでもない。又、それゆえに、数多くの名ソリスト達との共演に於て、又、指揮者としての高橋利夫氏の要求に、適確に反応することができたのだろう。

20年目を迎えた今年春、コンチェルティーノは、さいわいにも若い2人の音楽家と協演する機会を得た。一人はチェロの林峰男氏であり、もう一人は、指揮者堤俊作氏である。

コンチェルティーノのメンバーは、この2人の演奏に深い共感を覚えずにはいられなかった。なぜなら、これまでの共演者は指揮者も含めて、メンバーの一廻り、いや二廻りも三廻りも上の年齢層のいわば大先生であり巨匠ともいふべき人々が多かったのである。それ故、メンバーはそのすばらしい音楽に何とかついていこうという姿勢で演奏にのぞんできたからだ。だが、

彼ら二人の音楽は、いわばメンバーと同世代のフィーリングの音楽であり、メンバーの意図する音楽の代弁者のようにも思えた。そして、そういう音楽を具現する彼ら二人との出会いは、メンバーの血をわかせる、肉おどらせる結果をうんだのである。一方、彼ら二人も、コンチェルティーノを非常に高く評価し、現に6月に開かれた両者の共演が、7月には松本でなされ、又来年5月20日には、東京は石橋メモリアルホールに於てなされることが決定している。

今日、1978年11月12日、記念すべき20周年の演奏会が開かれようとしている。今日の演奏が、あの第十回の演奏会をしの

ぐ、感動的で、これからつづく30周年への、内容あるワンステップとなることを願ってやまない。



CONCERTINO DI KYOTO

指揮者 堤 俊作		江村 孝哉	ヴィオラ, 第15回入団 本会ヴァイオリン科助教
田中 信介	第1 ヴァイオリン, 第9回入団 第15回以来コンサート・マスター 京都大学大学院1回生	仲佐 悦子	ヴィオラ, 第1回入団 本会ヴァイオリン科指導者
水野 敬子	第1 ヴァイオリン, 第11回入団 副コンサート・マスター 同志社女子大音楽科卒	新井 覚	ヴィオラ, 当団創立者 本会ヴァイオリン科指導者
松村 裕美子	第1 ヴァイオリン, 第7回入団 本会ヴァイオリン科指導者	壁瀬 雅彦	チェロ, 第7回入団 本会チェロ科講師
高木 泉	第1 ヴァイオリン, 第14回入団 ノートルダム女子大学3回生	森田 健二	チェロ, 第19回入団 同志社中学3年生
田原 明子	第2 ヴァイオリン, 第9回入団 勤務薬剤師	中井 敏雄	チェロ, 第18回入団 会社員
東田 涉	第2 ヴァイオリン, 第1回入団 長年コンサート・マスターを努めた 会社員	森田 昭	コントラバス, 第1回入団 医師
円城めぐみ	第2 ヴァイオリン, 第18回入団 同志社高校2年生	永田 悦子	チェンバロ, 第19回入団 同志社女子大音楽科卒, 大学講師
小泉 佐知子	第2 ヴァイオリン, 第18回入団 同志社大学1回生	辻 浩二	ホルン客演, 大阪市音楽団々員
西村 明男	第2 ヴァイオリン, 第20回入団 関西大学2回生	朝倉 洋	ホルン客演, 府立守口高校教諭

演奏歴

1959年11月20日	第1回演奏会	指揮・井手章夫	(祇園会館)
1960年11月19日	第2回演奏会	指揮・井手章夫	(京都会館第2ホール)
1961年11月18日	第3回演奏会	指揮・井手章夫	(京都会館第2ホール)
1962年11月17日	第4回演奏会	指揮・井手章夫	(京都会館第2ホール)
1963年11月23日	第5回演奏会	チェロ独奏・斉田出／指揮・井手章夫	(大谷ホール)
1965年1月7日	第6回演奏会	フルート独奏・吉田雅夫／指揮・井手章夫	(京都会館第2ホール)
1966年1月7日	第7回演奏会	ヴァイオリン独奏・河野昌彦／指揮・井手章夫	(京都会館第2ホール)
1966年11月23日	第8回演奏会	オーボエ独奏・丸山盛三／指揮・井手章夫	(勤労会館)
1967年11月5日	第9回演奏会	指揮・井手章夫	(大谷ホール)
1968年12月1日	第10回演奏会	オーボエ独奏・丸山盛三／指揮・井手章夫	(大谷ホール)
1970年1月11日	第11回演奏会	指揮・井手章夫	(大谷ホール)
1970年1月18日	特別演奏会	指揮・井手章夫	(松本・才能教育会館)
1970年11月29日	第12回演奏会	ピアノ独奏・辛島輝治／指揮・井手章夫	(大谷ホール)
1971年11月14日	第13回演奏会	指揮・井手章夫	(大谷ホール)
1972年11月19日	第14回演奏会	フルート独奏・高橋利夫／指揮・井手章夫	(大谷ホール)
1973年11月18日	第15回演奏会	フルート独奏・ルイ・モイーズ／フルートと指揮・井手章夫	(大谷ホール)
1975年2月2日	第16回演奏会	ピアノ独奏・辛島輝治／フルートと指揮・高橋利夫	(大谷ホール)
1975年11月9日	第17回演奏会	フルートと指揮・高橋利夫	(大谷ホール)
1976年10月10日	特別演奏会	フルート独奏・高橋利夫／指揮・井手章夫	(松本・才能教育会館)
1976年11月20日	第18回演奏会	フルート独奏・高橋利夫／指揮・井手章夫	(大谷ホール)
1977年11月27日	第19回演奏会	指揮・井手章夫	(シルクホール)
1978年6月25日	特別演奏会	チェロ独奏・林峰男／指揮・堤俊作	(シルクホール)
1978年7月30日	特別演奏会	チェロ独奏・林峰男／指揮・堤俊作	(松本市民会館)
1978年11月12日	第20回演奏会	指揮・堤俊作	(大谷ホール)

礼 服 専 門

【京都府教職員互助組合指定】

洋 服 店

三条店 京・中京区三条大宮西入 (075) 821-0448・811-9313  
京極店 京・中京区河原町蛸薬師西入 (075) 221-1863  
高辻店 京・中京区高辻中新道西入 (075) 312-2825

内 科

白 数 医 院

京都市中京区錦小路通室町西入

医師 白 数 久 兵 衛 電話 221-1280番

CONCERTINO  
DI  
KYOTO

### ピアノ

スタインウエー&ソングズ(ドイツ)

グロトリアン・スタインウエツヒ(ドイツ)

ヤマハ その他

### 電子オルガン

ヤマハエレクトーン

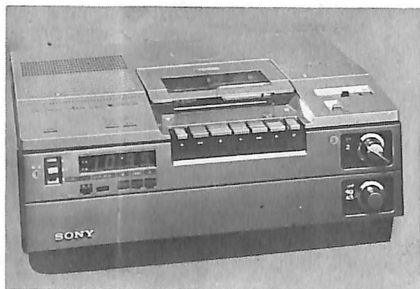
ハモンドオルガン(アメリカ)

ヤマハ特約店 **マツヨ楽器**

京・河原町今出川西入る  
☎ 231-1200・5544

輸入バイオリン及び弓  
附属品取揃えて有ります

ヤマハオーディオ



**ベータマックス** SONY  
ビデオデッキ SL-8500

¥228,000 (電キタイマー内蔵、RFユニット付)

大幅値下げ中!!

テレビの音は、テレビにまかせられない。

○TVX-700○TVX-500○TVX-500V○TVX-205V○TVM-201

音と電化の館

アサヒムセン電機株式会社

\*話題の音声多重放送用ステレオTVチューナー、各種入荷いたしました。

京都市中京区河原町三条上ル東入 電話/231-4475・221-2334・221-4212